

山の神秘：吉野の修験道信仰を探る

吉野を訪れる多くの日本人と外国人の旅行者は、桜の花の美しさに魅了されます。しかし、もう少しよく周囲を見渡すと、特徴的な白い衣を着て、杖や巻き貝の殻を持っている人を見つけるかもしれません。かれらは山岳の修行者（山伏または修験者）であり、吉野や高野山に起源を持つ山岳修行で日本の独特な信仰体系である修験道を実践しています。

修験道は文字通り、修験の道を意味し、断食、瞑想、経典の唱え、滝の下での祈りなどの禁欲的な修行を指します。修験道は、7世紀の伝説の神秘家であり術師でもある役行者または役小角（634-c. 700）が起源とされています。神道、仏教、密教の要素に加えて、シャーマニズムを含む民俗信仰と死者の霊が住む神聖な空間としての山の古代の崇拝を融合する高度に統合された宗教です。修験道は12世紀後半に一貫した宗教的実体に発展しましたが、最近では天台と真言の密教の宗派と結びつくようになりました。

修験道の神聖な山々には、奈良県の大峰山や葛城山、和歌山県熊野地方の山々、山形県の出羽三山峰などがあります。修験者は、より多くの人々に利益をもたらす霊的な力を修得するために、山で禁欲生活と肉体的困難を経験します。山に入ることは、死者の霊の領域を含む不敬な領域から神聖な領域への移行を表しており、禁欲は修験者を象徴的に仏へと昇格させます。

修験道は、山の禁欲生活だけではなく、寺院での実践と祈りの豊かな歴史も持っています。吉野の修験道の本堂は金峯山寺です。伝統では、役行者が7世紀に創立し、それ以来、巡礼ルートの重要な停留所ともなっています。本堂にある蔵王権現は1592年に完成しました。国宝であり、東大寺の大仏堂に次いで日本で2番目に大きい木造の建物でもあります。ここで信仰されている本尊は蔵王権現です。蔵王権現は神道の神であり、歴史的な仏である弥勒菩薩や観音の現れでもあります。桜の木でできた蔵王権現の像は、約7メートルの壮大な高さで、歯をむき出した激しい表情で、印象的な姿をしています。しかし、その怒りは、世界中の人々を悟りの道に導くように、厳しい親が子供を諭すというものです。また、歴史的な仏である弥勒菩薩と観音を表す同様の巨大な蔵王権現像が脇侍として祀られています。

明治時代（1868-1912）に、政府は日本で神道と仏教の分離を強制し、修験道のような合同信仰を事実上禁止しました。ほぼすべての場所が神道か仏教に分かれ、修験者は神道の宮司または仏教の僧侶になりました。これは1947年憲法の宗教の自由の保障によって変わりました。今日、修験道は信徒と修験者の繁栄するコミュニティであり、すべて自然との交わりと厳しい訓練を通して精神的な成長を目指しています。